

サン・テグジュペリの『ある人質 への手紙』の背景

加藤 宏 幸

『ある人質への手紙』 *Lettre à un otage*¹⁾ が出版されたのは1943年2月である。1940年3月からこの作品が発表されるまでのサン・テグジュペリ Saint-Exupéry の生涯を辿り、さらにその時から彼が行方不明になる1944年7月31日までの生涯を辿ることによって、この作品がいかなる背景のもとで書かれたかを明らかにしたい。ついで、作品の内容を分析し、最後に、生涯の出来事と作品の内容を関連づけ、この作品がなぜ書かれなければならなかったかを明らかにしたい。

1. 生涯

サン・テグジュペリは、フランスの作家の中でもっとも波瀾に富んだ一生を送った。それ故、彼の伝記は数多く出版されているが、その中でもっとも優れているものは、エリック・デショド Eric Deschodt の『サン・テグジュペリ、伝記』²⁾ ではないかと思う。情熱をもって、事実に基づいて厳密に書かれたこの伝記には、彼の生涯の主要な出来事が漏れなく述べられているだけでなく、彼の日常生活にも言及されている。作品を超えて、彼の真の姿を語ることによって、彼の人間像を明らかにした点に、この伝記の特徴がある。主としてこの伝記によって、1940年3月から彼の死までの生涯を要約して述べてみたい。

1940年3月、ドイツ軍の攻撃が激化し、サン・テグジュペリの所属する2/33飛行大隊はオルリー Orly に退却する。毎晩飛行大隊は新しい土地に向けて後退し、ついにアルジェ Alger に移る。

やがてフランスとドイツとの間で休戦条約が調印され、サン・テグジュペリは動員解除になる。1940年8月14日、船でマルセイユ Marseille に着く。この日から苦悩の時期が始まる。ドイツに侵略・占領されて、彼を育ててくれたフランスが解体してしまっているのを見た。マルセイユからアゲ Agay の妹の家に赴き、母と姉に再会する。この再会の安

1) SAINT-EXUPÉRY (Antoine de), *Lettre à un otage* (*Œuvres complètes de Saint-Exupéry*, tome III, Paris, Éd. du Club de l'Honnête Homme, [© 1976], pp.13-42).

2) DESCHODT (Eric), *Saint-Exupéry, biographie*, Paris, Éd. Jean-Claude Lattès, [© 1980], 396p.

らぎは短期間である。占領下のフランスのことを考えると苦しくなる。『城砦』 *Citadelle* を執筆して苦しみを慰める。

ある人からド・ゴール de Gaulle 将軍のいるイギリスへ行くことを勧められたが断った。将軍が彼をよく思っていないことを知っていたからであった。しかし彼は、このままフランスに留まっていることはできないと思った。飛行機の操縦はできなくなっていたし、検閲が次第に厳しくなり、書いたものを発表することもできなくなっていたので、何もすることがなかったからであった。

彼は、アメリカが唯一の避難所であると思った。アメリカでは『人間の土地』 *Terre des hommes* の作家として知られていたし、その作品はアメリカでもよく売れていたもので、経済的な心配なしに過ごせるからであった。パスポートと出国ビザを取得するために、ヴィシー Vichy へ行く。

カルカソンヌ Carcassonne の近くのヴィラリエ Villalier に避難していたガストン・ガリマルル Gaston Gallimard のもとに立ち寄り、彼に『城砦』の草稿の一部を手渡す。さらに、サン・タムール Saint-Amour に行き、レオン・ウェルト Léon Werth に会い、アメリカへ行くと告げる。ウェルトはヒトラー Hitler に対する戦争は人類の義務であることをアメリカ人に知らせてくれ、と言う。アメリカに渡ってから、ウェルト宛に『ある人質への手紙』を書くであろう。この作品の中で、ウェルトと過ごした1日のことを感動的に思い起こすであろう³⁾。

彼は、悲惨な状態にあるフランスを後にして、安楽な生活ができるアメリカへ出発していいのかどうか真剣に悩むが、フランスでは全く仕事ができないと判断し、出発を決意する。

ヴィシーに戻り、パスポートと出国ビザを受け取る。亡命してもフランスの悲惨を記憶に留めて置くために、出発する前にパリを見て置きたいと思う。占領地域であるパリに入るためには複雑な手続きが必要であったが、幸いにも対独協力者の作家ドリュ・ラ・ロシェル Drieu La Rochelle に会い、彼と共に簡単にパリに入ることができた。通りがドイツの軍人であふれているのを見て驚く。

家族に別れを告げるためにアゲに戻る。スペインを通りリスボン Lisbonne に行き、そこから船に乗る計画を立てたが、スペイン内戦の時に人民戦線を支援したという理由で入国を拒否された。そのため、アルジェに渡り、モロッコを通りリスボンに到着する。ドイツの侵略の脅威にさらされているリスボンの様子は、『ある人質への手紙』の中に詳細に描写されている⁴⁾。

3) SAINT-EXUPÉRY, *op. cit.*, pp. 26-29.

4) *Ibid.*, pp. 13-17.

彼は、アメリカへの出発を目前にして、またもためらい悩んだ。不幸な同胞を見捨てて、アメリカで安楽な生活を送ることは卑劣ではないか。かつて2/33飛行大隊の仲間と共に戦闘に参加した時のように、この悲惨に参加すべきではないだろうか。

1940年11月27日、郵便機を操縦していた時期の同僚で、最愛の友人であるギヨメ Guil-laumet の死を知る。業務に従事中戦闘に巻き込まれ、撃墜されたい。彼の死を心の中で確認するには何か月もかかるであろうし、それまでは自分は彼を必要とするであろう。

12月に、サン・テグジュペリの乗った船はアメリカに向かって出航した。その船にはたくさんの方の亡命者が乗っていたが、アメリカへの渡航がどのような意味を持っているのか自分自身に問いただそうとする者はいなかった。船上の亡命者たちの姿は、『ある人質への手紙』に描かれている⁵⁾。

サン・テグジュペリは、1940年12月31日ニューヨークに着く。彼はアメリカではすでに有名人である。待ち構えていた新聞記者が質問を浴びせる。『人間の土地』が『風と砂と星』*Wind, Sand and Stars* という題でアメリカで出版されていて、その印税を出版社から受け取ることができたので、生活に困ることはない。

彼は英語が話せなかったので、付き合いはほとんどフランス人に限られていた。昔の友人に再会し、新しい友人も見つけたが、彼に敵対する驚くべき数のフランス人がいるのを発見し驚いた。ニューヨークのフランス人は、ペタン Pétain 派、ド・ゴール派、無党派の三つのグループに分かれていた。大きなアメリカの微少なフランス共同体の中で、フランス人同士が侮辱し合い、密告し合って、互いに激しく相争っていた。サン・テグジュペリはそれに憤慨したが、争いに加わることを避けた。

大部分のアメリカ人は、ヨーロッパで行われている戦争に無関心であった。戦争にアメリカ人の関心を向けさせるために、すでにアメリカでは著名な作家であったサン・テグジュペリを利用しようと考えた人たちがいたが、彼は応じなかった。イギリスに渡り、自由フランス *France libre* の一員として戦闘に参加したかったが、ド・ゴール将軍が認めるはずはなかった。全フランスを具現しているのは自分たちであると信じているド・ゴール派の人たちのうぬぼれに、彼は憤慨する。ドイツに占領されて苦しんでいるフランスこそがフランスであり、そこ以外にフランスは存在しない。この考え方は、『ある人質の手紙』の最後の部分で叫ぶような調子で語られる⁶⁾。

ド・ゴール将軍は休戦を激しく非難したが、サン・テグジュペリは戦争に参加した者として、休戦はしかたがないと考えた。休戦は新たな戦いの準備期間である。

5) *Ibid.*, pp. 17-20.

6) *Ibid.*, p. 42.

この時期サン・テグジュペリは、5年前から書き続けている『城砦』の執筆に力を注ぎ、さらに『ある人質への手紙』と『星の王子さま』 *Le Petit Prince* を書こうとしている。亡命の時期は、文学上では、彼の生涯でもっとも豊かな時期となるであろう。

出版社は、書物を書き、フランスとフランスの敗北についてアメリカ人に語るように勧めた。注文を受けて書くのは気が進まなかったが、何か書かなければならないと思った。フランスは卑怯だとか、フランスは死んだとか、対独協力者を徹底的に粛清すべきだとか言うのを聞いて黙っているのは辛かったからであった。書物を書くよう催促していたのは出版社だけではない。ヴィシー派だと彼を非難する海外の対独レジスタンス組織の同胞たちは、書いて弁明することを要求していた。

1941年1月末、ヴィシーの国民会議 *Conseil national* の一員にサン・テグジュペリが任命されたという知らせが、ニューヨークで放送される。国民会議は150人の著名人で構成された机上の会議であって、国家元首が祖国再建のための知恵を求めることを目的としたものである。非難の叫びが上がったので、彼は記者会見を行い、その任命はヴィシー政府によって一方的に行われたことを説明した。もちろん、彼は拒否の返答をした。しかし、非難は鎮まらなかった。彼はペタンのために飛行機を買いにニューヨークに来たのだという非難が続いた。

1941年の前半、サン・テグジュペリは絶望に陥っていた。彼の乱れた生活に、フランス人のみならず真面目なアメリカ人も狼狽した。多くのアメリカ人が彼の建設的な活動を心から願っていたにもかかわらず、彼は無為に日々を過ごしていた。

サン・テグジュペリは、英語を学ぶことをあくまでも拒み続ける。短期間しかアメリカに滞在しないつもりでいたからであった。再び戦闘に参加したいと考えていたが、いつ出発できるか分からなかった。ルーズベルト *Roosevelt* 大統領や洞察力のあるアメリカ人は、アメリカがいずれ参戦しなければならなくなることを知っていたが、国民感情はまだ参戦に傾いてはいなかった。イギリスに引き渡される飛行機の護送に参加したいと申し出たが、健康状態を理由に断られた。友人たちは、書くことによってでも戦闘に参加できると説得し、彼にフランスについて書くように勧めるが、全然聞き入れない。彼にとっては、書くことは参加することではないからであった。

ニューヨークのフランス人学校で、彼の作品の数節を朗読するように頼まれ承諾したが、愛国者たちが何度も電話をかけて来て、青年たちを墮落させると非難した。興奮した人たちは、彼をナチ呼ばわりした。

1941年6月、サン・テグジュペリは『戦闘パイロット』 *Pilote de guerre* の執筆に着手する。昼寝て、夜猛烈な激しさで書き続ける。ロシアに侵入したドイツ軍は勝利を重ねている。この作品を書き上げて、フランスの戦いがいかなるものであったかアメリカ人に

理解させなければならない。1941年11月、この作品はほぼ完成し、彼の友人たちはほっとする。

12月7日、真珠湾に停泊中のアメリカの艦隊が、日本の海軍航空隊の攻撃を受けて破壊される。翌日、ヒトラーはアメリカに宣戦布告する。サン・テグジュペリは、終わりが始まったと思う。

『戦闘パイロット』は、1942年2月にアメリカで出版される。すぐに翻訳が『アラスへの飛行』*Flight to Arras* という表題で、雑誌『月刊大西洋』*The Atlantic Monthly* に3回に亘って発表される。それは、戦争・フランス・人間について書かれた作品であり、多くのアメリカ人に読まれた。フランスの占領地域にも届き、ドイツ軍の検閲に付されたが、「このばかげた戦争を始めたのはヒトラーだ」という文の削除を命じられたが、出版は許可された。1942年12月、この作品は書店のショーウィンドーに現れ、戦いに破れた国民への素晴らしいクリスマスプレゼントとなった。

アメリカでは、『戦闘パイロット』は、数カ月間ベストセラーとなる。アメリカ人はそこにチャーチル Churchill の演説と共に、『わが闘争』*Mein Kampf* に対する民主主義国のもっとも立派な回答を見た。

アメリカが参戦するや否や、サン・テグジュペリは、あらゆる手段を利用して、自分の志願兵役を認めさせようとする。友人たちは皆、こんなにも熱心に戦いに参加しようとするのは異常だと思う。

数年来サン・テグジュペリのデッサンによく出て来る人物の1人は、長いスカーフをなびかせた少年である。1942年の初めに、彼は子供向けの作品を書く決心をする。大分ためらったが、自分で挿絵を描くことにする。夜文を書き、昼デッサンを描く。

1942年5月、サン・テグジュペリは、アメリカの青年に向けて『学問への道』*The Sentier Scholastic* を書き、彼らに人間共同体の建設を説く。

彼は、『星の王子さま』や『城砦』を書き続けながらも、戦争を忘れることはなく、戦闘に参加しなければならないといつも考えていた。ついに、ヨーロッパでの戦闘に参加できるようしかるべき筋に働きかけを開始する。自分自身で直接頼むことができるように、英語の教師を雇い、英語の勉強を始める。

1942年11月6日、アメリカ軍とイギリス軍が北アフリカに上陸する。このニュースを聞いて、彼は興奮する。

11月29日、「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」*New York Times Magazine* に、『到る所にいるフランス人への公開書簡』*Lettre ouverte aux Français de partout* を発表する。フランス人が党派に分かれて争うことを止め、団結して祖国解放のために闘うべきことを訴える。この訴えに、ドゴール派の人たちは怒った。すべてのフランス人を同

列に置き、ヴィシー政府の罪を許すものだ、と中傷した。彼はまたもや、ナチ、ファシスト呼ばわりされることになった。

1942年12月初旬の数日で、『戦闘パイロット』は8千部売れ、フランス全土に流布し始める。戦闘に参加した人によって、初めて国民の責任放棄が描かれ、分析され、批判された。敵の高射砲の弾丸にさらされながら偵察飛行する話は、フランス国民に彼らの弱点を教えた。彼らは、祖国を救うためには、利己主義や虚栄心を捨てなければならないことを知った。ドイツ軍による検閲では、7語の削除を求められただけであったのに、その作品全体を非難した友人たちがいた。それは対独協力者たちであった。この作品は、ドイツ軍の検閲下にあった多くの新聞で賞賛されたが、一方非難は激烈となった。ついに発売禁止になるが、1942年末には早くも最初の地下版が出た。

1942年12月19日、ニューヨークで発行されているフランス語新聞『勝利に向かって』*Pour la Victoire* に、福音主義者ジャック・マリタン Jacques Maritain が、「時々裁かねばならない」*Il faut parfois juger* という表題の長い記事を発表する。そこで彼は、ペタン体制に寛大であると、ペタンとドイツとの共謀の罪を許しているとサン・テグジュペリを非難した。さらに彼は、ヴィシーの過ちを忘れていると、第一戦でドイツと戦うことしか望まないとサン・テグジュペリを非難した。マリタンは、ペンによって戦うことができると思っていた。尊敬するマリタンの非難に、サン・テグジュペリの心は深く傷ついた。マリタンに会い、自分の考えを説明したが、理解してもらえなかった。

1943年2月、学識あるフランス人弁護士ロベール・タンジェ Robert Tenger によって経営されているブレンターノ Brentano 出版社が、『ある人質への手紙』を出版する。それは、長い書簡または数十ページの小さな書物である。その装丁は、かつてガリマール Gallimard 出版社に勤めていて、アメリカに亡命したジャック・シフラン Jacques Schiffrin によって行われ、白い透かし模様のある黒い表紙上に、白文字と赤文字のタイトルが浮き出た美しいものであった。

『ある人質の手紙』は、レオン・ウェルト Léon Werth に捧げられている。サン・テグジュペリのもっとも親しい友人であるウェルトは、ユダヤ人であり、無政府主義的傾向の思想を持ち、今はドイツ占領下のフランスに人質となって残っている。彼は作家であったが、その書物はいずれも大して売れず、その名もほとんど知られていなかった。

この作品でサン・テグジュペリは、ドイツに対するフランスの敗北を認め、今後は今までより正しい社会を建設するために、フランス人同士が相争うことを止め、友愛によって結ばれなければならないことを説いた。この作品が出版されるや否や、彼に対する猛烈な反感がニューヨークで起きた。ニューヨークに住んでいる亡命者の大部分は、作品の冒頭に描かれた人たちであった。亡命者の1人であるのに、亡命者を侮辱するのは、彼らには

許せないことであった。

アメリカ軍の北アフリカ上陸によって、フランス奪回への基盤ができた。サン・テグジュペリは、アメリカ軍の一員に加えてくれるよう頼んだが拒否された。その時、ベトアール Béthouard 将軍が、アフリカの軍隊のために武器調達にやって来た。彼は将軍を通してアメリカ当局に働きかけ、ついに移動証明書の入手に成功する。

1943年3月、サン・テグジュペリは、船で北アフリカに向かってアメリカを去る。出発の数日前に、『星の王子さま』が出版された。砂漠に不時着したパイロットのところ突然現れた、星から落ちて来た子供の話に、多くの批評家は驚いた。今世紀において、出版当初これほど理解されなかった作品はない。しかし、年月が経つにつれて、その評価はますます高まる。

1943年5月4日、サン・テグジュペリはアルジェに上陸する。かつて所属していた飛行中隊の仲間たちに会う。すぐに昔の部隊へ復帰できるよう奔走し始める。ジロー Giraud 将軍がアメリカ軍に対して働きかけてくれたが、アメリカ軍はなかなか承諾しない。P38 ライトニング Lightning 機の操縦は、43歳では不可能であるというのが拒否の理由であった。ジロー将軍が、アイゼンハワー Eisenhower 将軍に直接会い懇請した結果、サン・テグジュペリの復帰が許可される。彼は、3年前に止めてしまっていた飛行機の操縦を再開する。まず各種の飛行機に乗り訓練し、合計24時間飛行する。操縦を忘れていなかったことが確認できて満足する。

1943年6月3日、ド・ゴール将軍が、国家解放フランス委員会 *Comité français de libération nationale* を設立する。その翌日、サン・テグジュペリは、ウーヅタ Oujda の飛行中隊に復帰する。中隊長ガヴワール Gavoille が、サン・テグジュペリが熱望していたP38ライトニング機による飛行を許可する。P38には200近い計器が備わっていたが、最初の飛行はうまく行った。

ニューヨークにおける党派に分かれてのフランス人同士の争いもすさまじかったが、アルジェにおいては、その争いはもっと恐ろしかった。ジロー将軍派とドゴール将軍派の争いが展開されていた。サン・テグジュペリには、争いは耐え難かった。『Z将軍への手紙』 *Lettre au général Z* (または『X将軍への手紙』 *Lettre au général X*) を書き始めたのはこの時期である。

1943年6月16日、サン・テグジュペリは、アルジェ駐在のアメリカ領事ロバート・マーフィー Robert Murphy と会見し、自分の飛行中隊へのさらに多くの飛行機の供与と、フランス人パイロットの戦闘への参加を要請し、認められる。7月21日、フランス上空1万メートルを偵察飛行し、ローヌ河の谷を写真撮影し帰還する。20歳台でP38を操縦できたなら幸せであったろうが、43歳でこの飛行機を操縦しても、大きな喜びは見い出せなかつ

た。『Z将軍への手紙』を書き上げたが、発送されなかった。

8月1日、2回目の偵察飛行から帰還した時、着陸に失敗し、飛行機は滑走路を飛び出してしまふ。それが原因で、P38を操縦できる年齢をはるかに超えていたサン・テグジュペリは、飛行を禁止される。アメリカの上級将校を招待し宴を張り、禁止を解除するよう頼んだが無駄であった。彼のすべての作品が、アメリカ軍によってアメリカ兵士への推薦書に選ばれていたが、それも禁止の解除には役立たなかった。すっかり元気がなくなり、アメリカに戻ることを考える。

戦闘への参加を拒否されたため深く傷つき、『城砦』の執筆に取りかかったが、専心でできなかった。アルジェでは相変わらず、アメリカ人やイギリス人が驚愕するほど、フランス人は党派に分かれて激しく争っている。対独協力者の粛清についての話を聞き、彼は動転する。多くのフランス人が、厳しい粛清なしにはフランスの再生はあり得ないと主張する。

1943年10月30日、ド・ゴール将軍は、アリアンス・フランセーズ *Alliance française* 設立60周年記念を祝して演説することになっている。その演説でド・ゴール将軍は、困難な時代にフランス精神を擁護した主要な作家について述べることにしたが、その作家の作品を読む時間がなかったため、その作家の名簿の提出を求めた。名簿にはサン・テグジュペリの名が含まれていたが、当日ド・ゴール将軍は、その演説で彼については全く述べなかった。彼は、その時アルジェに来ていたジッド Gide の前で、ド・ゴール将軍を嘲弄する。

兵役復帰のためにあらゆる努力をしたが、すべて失敗する。頭ごなしの拒絶に出会っても落胆せず、入隊を求めてあらゆる手段を行使する。

1944年2月、ジャン・アンルーシュ Jean Amrouche が雑誌「箱舟」*L'Arche* を刊行し、『人質への手紙』を掲載したが、サン・テグジュペリはあまり喜ばない。彼の願いは、P38を操縦し、再び戦闘に参加することであった。ついに、リオネル・シャサン Lionel Chassin が、彼の指揮するサルジニア Sardinie の第31爆撃飛行中隊に雇ってもらいたいと申し出た。しかし、爆撃機に搭乗はできるが、操縦はできないという条件付きであった。操縦はできないし、多量の爆弾をイタリアに落とすことには耐えられなかったため、非常にためらったが、入隊を承諾した。

サン・テグジュペリは、2/33飛行大隊への復帰をひたすら願っていた。『人間の土地』を読んで感動したことがある「ライフ」*Life* 紙の従軍記者で写真家のジョン・フィリップス John Phillips がアルジェに立ち寄った時、サン・テグジュペリと会う。サン・テグジュペリは、飛行禁止となり、そのため何も書く気にならない、と彼に話す。その話を聞いてフィリップスは、エーカー Eaker 将軍の参謀に知人がいるので、彼を通して2/33

飛行大隊への復帰を将軍に頼んでみると約束する。将軍は決定を延期する。サン・テグジュペリはフィリップスとナポリに赴き、将軍に直接会見し、2/33飛行大隊への再復帰と戦闘機操縦の許可を得る。フランス軍も復帰を認める。

1944年5月8日、2/33飛行大隊は、ナポリからサルジニアのアルゲロ *Alghero* に移動する。サン・テグジュペリは飛行訓練を再開する。

『アメリカ人への手紙』 *Lettre aux Américains* を書き、フィリップスに渡す。これは、2国間の友情に関して書かれた美しい作品である。

サン・テグジュペリは、P38に乗り偵察飛行を再開する。6月8日には、エンジンが火を噴くが無事帰還する。6月15日、酸素吸入器が故障し、引き返す。6月24日、燃料タンクの故障。6月29日の誕生日には、1個のエンジンで、コルシカ *Corse* のボルゴ・バステリア *Borgo-Bastia* に緊急着陸。

1944年7月17日、飛行大隊はコルシカのボルゴ基地に移動する。ガヴワールは、6月29日の事故について、サン・テグジュペリに忠告をを与えようとして、彼の部屋に行く。サンテグジュペリは、まだ飛ばせてくれ、飛行禁止命令が下れば生きていけない、と叫ぶ。フランスに戻れる日が近づいていると言うガヴワールの話さえぎる。彼は、自分にはフランスへの帰還があり得ないことを知っている。『城砦』の原稿が詰まったスーツケースをガヴワールに手渡し、保管を頼む。

この時期に、サン・テグジュペリは友人に数通の手紙を出している。アメリカ女性シルヴィア・ハミルトン *Sylvia Hamilton* 宛の手紙に、次のように書いている。「ニューヨークに滞在していた時、私がドゴール派の一員とならなかったのは、彼らの憎悪の政策が、私にとって真実ではなかったからだ。戦争を恐れたからでもないし、安寧を望んだからでもない。ある人たちは、ニューヨークでの私の生活を非難し、私を罵った。それで今私は、骨の髄まで自分の肉体を戦争に参加させ、自分が純粹であることを証明できて大変満足している」⁷⁾。

またピエール・ダローズ *Pierre Dalloz* 宛の手紙には、次のように書いている。「ドイツの戦闘機の一団に追われて、亀のような速度でアルプス山脈の上空を飛行していた時、私は、北アフリカで私の書物を発売禁止にした超愛国主義者のことを考えて静かに笑っていた……。もし私が撃墜されることがあっても、私は全く後悔しない」⁸⁾。

1944年7月31日8時45分、サン・テグジュペリは、P38の223号機に乗ってボルゴ基地から飛び立ち、行方不明になる。幾人かの人たちが、7月31日に、2機のドイツ戦闘機に撃墜されたらしいP38が、アンチーブ *Antibes* とカーニュ・スュール・メール *Cagnes-*

7) DESCHODT, *op. cit.*, pp. 394-395.

8) *Ibid.*, p. 395.

sur-Mer 間にあるビオ Biot の町の民家をかすめて墜落するのを見た、と証言している。また、そこから100キロメートル離れたラ・シオタ La Ciotat では、ある人が、炎に包まれたP38が海に落ちるのを見た、と証言している。

2. 作品の内容

サン・テグジュペリは、1940年12月、アメリカへ亡命するためにポルトガルのリスボンにやって来た。間近に迫ったドイツ軍の侵入が人々の話題をさらっていた。東の間の幸福に浸っていたリスボンは、ドイツの侵入に敢然と対抗していた。彼は、ヨーロッパの夜を飛び回っている爆撃機の群れが、リスボンに重くのしかかっているように感じた。軍隊も大砲もなく、芸術を崇拜し、偉大な過去の遺産を持つポルトガルまでも粉碎されてしまうのだろうか。彼は、すべてが完璧に近いリスボンの町を毎晩歩き回った。このような素晴らしい町も破壊されてしまうのだろうか。

彼は、テーブルに死者のための席を取って置く奇妙な家族をいくつか知っていた。このような死に対する挑戦は慰めにならない。死者を死者として認める時、死者は別の形で現存する。最高の友人であるパイロットのギヨメを失ったが、その悲しみに耐えることを受け入れた。ギヨメは二度と現れることはないが、決して不在でもない。

ポルトガルは、幸福な状態が間もなく消滅することを知りながらも、その存在を信じようとしていた。リスボンが悲しみの雰囲気にも包まれているのは、亡命者たちのせいでもあった。彼らは、財産を保護するために、同胞の悲惨を見捨てて来た人たちであった。

サン・テグジュペリは、激しい戦闘から抜け出て来た。9カ月間ドイツの上空を1日も中断せずに飛行して来た彼の飛行大隊は、ドイツの攻撃を受ける度に、搭乗員の4分の3を失っていた。故国に戻ってみると、町々は深い闇に包まれていた。ところが、フランスからあまり離れていないのに、ここのカジノは人で一杯であった。彼はカジノに行き、賭博をする人を眺めた。間もなく彼らの賭けている財産は無意味なものになるかもしれないし、使用している貨幣も通用しなくなるかもしれない。

湾内の商船には、亡命者が乗り込んでいた。彼は思った——『旅人にはなりたいたが、亡命者にはなりたくない』。亡命者たちは、過去のことをしきりに物語った。だが、亡命して来たのだから、そのような過去は何一つ彼らの助けとはならない。亡命者たちは、不可能と知りながらも、間もなく祖国に帰れると信じようとしていた。しかし、彼らは立ち戻る家のない放蕩息子であった。

亡命者が乗組員に少しばかり軽蔑されていたのは、貧しさのためではない。彼らに欠けていたのは金ではなく、充実 *densité* であった。誰も彼らを必要としなかったし、彼らに助けを求めようとしなかった。この亡霊たちを誰も憎まなかったし、嫉妬もしなかった

し、邪魔もしなかったが、誰もかけがえのない愛で愛しはしなかった。

彼は思った——『大切なのは、生きて来た支えがどこかに残っていることだ。習慣でもよい。家族の祝宴でもよい。思い出の家でもよい。大切なのは、帰るために生きることだ』。

彼は、3年間サハラ砂漠で過ごした。一見すべてが孤独と貧窮でしかないサハラ砂漠での生活であったが、その3年間は、彼にとってはもっとも素晴らしい年月であった。亡命者を満載したこの船の上で、彼には砂漠が理解できるように思えた。サハラ砂漠は見渡す限り砂ばかりであるが、しかしながら目に見えない神々が、ひそかな生きた筋肉組織をそこに築いている。一様ではなく、すべてが方向づけられている。

磁極が、はるか彼方からこの砂漠を磁化している。それは、記憶の中に生き生きと留まっている子供時代の家であり、生きていた以外何も知らない友人である。砂漠には確かな豊かさは全くないし、見るものも聞くものも全くないので、内面生活はまどろむどころか強められ、人間は何よりもまず、目に見えない懇願 *sollicitations* によって生気づけられていることを認めざるを得ない。

サン・テグジュペリを乗せた客船は、アメリカに向かって航行している。「私が、物悲しい船の上で、自分がまだ豊かな方向に満ちていると感じたのは、まだ生き生きとした惑星に住んでいたのは、私の背後、フランスの闇の中に消え失せた、だが私にとって大切な存在になり始めていた数人の友達のおかげだった」⁹⁾。フランスは、彼にとっては抽象的な存在ではなく、彼が頼る一個の肉体であった。その友達は、彼が進路を決めるのに必要であったし、立ち戻る場所を知り、この世に存在するために必要な人であった。彼の国は、その友人たちを通して彼自身の中に生きていた。「全面占領の結果、フランスが、海難を乗り越えたかどうか分からない、すべての灯火が消えた船のように、その積荷もろともひと塊となって沈黙の中に入り込んでしまった今、私の愛する人たちの一人一人の運命が、私の中に身を落ち着けた病気よりももっとひどく私を苦しめるのだ。彼らのもろさによって、私の本質が脅かされているのを発見する」¹⁰⁾。

その夜、サン・テグジュペリは友人の1人レオン・ウェルトのことをしきりに思い出す。彼はユダヤ人であり、今病気だ。彼の住む村の農民たちがかくまってくれなければ、生きていられないであろう。大海の中で、サン・テグジュペリは砂漠にいるような気になる。かつてサハラ砂漠にあって、愛する人たちを思った。あの時と同じように、今愛する人々を思う。

レオン・ウェルトに対する特殊な愛情は、どんな内密な出来事によって作り上げられるのだろうか。本質的な出来事は単純であって、語ることは何もない。夢の中でその友人

9) SAINT-EXUPÉRY, *op. cit.*, p. 24.

10) *Ibid.*, pp. 24-25.

を思い起こし、語りかけなければならない。

サン・テグジュペリは、ソヌ河の岸のレストランで、ウェルトとペルノー酒を飲んだ時のことを思い起こす。ウェルトは医者にアルコールを禁じられていたが、重要な時には酒を飲んだ。2人の出会いは重要だったからだ。彼らの中には、目に見えぬ祭りが存在していた。穏かに日が照っていた。混乱を逃れて、ある決定的な文明 *une civilisation définitive* の中に入り、彼らは完全に安らかだった。彼らを支配していたのは、確信 *certitude* という感情だった。だから、宇宙が彼らを通してその善意を示していた。

サン・テグジュペリ、ウェルト、給仕女、そしてペルノー酒と一緒に飲むように誘った2人の船頭、彼らの中には完全な一致が築き上げられていた。この一致の本質は何か。言葉では十分に説明できない。ここでの本質はほほえみ *sourire* である。サン・テグジュペリの、ウェルトの、給仕女の、2人の船頭のほほえみである。人はほほえみによって報いられ、生气づけられ、ほほえみのために死ぬこともできる。

1936年8月、スペイン内乱の現地探訪の時であった。朝の3時、サン・テグジュペリは、ある貨物駅で秘密物資の積み込みを見物していた。無政府主義者の民兵に不審な人物に思われ、逮捕される。衛兵所に変えられた地下室に連れて行かれる。パスポートの提示を求められたが、ホテルに忘れて来ていた。衛兵所には、退屈 *ennui* と眠気 *sommeil* が支配していた。民兵たちは皆無表情だった。彼は、民兵たちのだらしさに耐えられなかった。彼が感じたのは、不安よりもむしろ、この馬鹿らしさに対する嫌悪だった。

ほんとうに危険なのだろうか。民兵たちは決定を下したのだろうか。革命の先頭に立つ人たちは、人間の本質を調べず、その外面によって人間を裁く。疑わしい点があれば、彼らは銃殺する。サン・テグジュペリは、自分の存在の重さを民兵たちに知らせるために、自分のことを何か語りたと思った。多くの障害を乗り越え、多くの重い病気に打ち勝ち、多くの絶望を乗り越えて今日に至った37歳の生涯を語り、彼らに重荷を負わせたいと思った。

その時、奇跡が起こった。サン・テグジュペリが、監視人にたばこを1本くれと言って微笑すると、彼もまた微笑した。地下室の石油ランプも、書類の散らばったテーブルも、壁にもたれた兵士たちも、すべてが元のままであったが、それらの本質は変わっていた。彼は、異常な存在感を覚えていた。そこにいる兵士たちと血のつながりがあると感じていた。彼に微笑した青年は、今や内気さを見せていた。そのテロリストは、人間誰もが持つ傷つき易い部分を見せていた。他の民兵たちも人間に戻った。

サン・テグジュペリはまた、遭難した時彼を救助に来てくれた救助者の微笑を、彼が救助者であった時の遭難者の微笑を思い出す。「真の喜びとは会食の喜びだ」¹¹⁾。「われわれ

11) *Ibid.*, p. 36.

は、言語や階級や党派を超えて、微笑の中で再び結ばれるのだ」¹²⁾。

繁栄や安楽の中であって、われわれは満足できない。素晴らしい祭りに変わる人との出会いこそがきわめて重要なのだ。

人間を尊重しなければならない。ナチス党員は、自分自身しか尊重しない。ナチス党員は、創造的矛盾 *contradictions créatrices* を拒否し、すべての上昇の希望 *tout espoir d'ascension* を破壊する。「秩序のための秩序は、人間から世界と自分自身を変形するという本質的な能力を奪い去る。生が秩序を創造するのであって、秩序が生を創造するのではない」¹³⁾。

「これに反してわれわれには、上昇は終わらず、明日の真実は昨日の誤りを糧とし、乗り越えるべき矛盾は、われわれの成長のための腐植土にはほかならないように思える。われわれは、自分と異なる人々でさえ同胞と認める。だが、なんと奇妙なつながり *parenté* であろう。つながりは、過去ではなく未来の上に築かれるのだ。発端ではなく目標の上に。われわれは、さまざまな道を通して、同じ会合の場所へ向かって苦勞しながら歩む巡礼者だ」¹⁴⁾。

われわれの上昇の条件である人間の尊重が、危機にさらされている。現代の世界は崩壊しかけている。提出される問題には一貫性がなく、その解決は相反している。昨日の真理は死んだが、明日の真理はまだ打ち立てられていない。方法において意見を異にすれば、われわれは、同じ目標に向かって急いでいることをもはや認められなくなってしまふ。「……もし私が、何らかの党派的情熱に閉じこもれば、精神的明白さ *une évidence spirituelle* に役立つのでなければ、政治は意味を持たないということを忘れてしまう恐れがある。われわれは、奇跡の数時間に、人間関係のある質を味わった。われわれにとっては、そこに真理がある」¹⁵⁾。

「行動がどんなに緊急を要するにしても、われわれには、行動を支配する使命を忘れることは許るされない。それを忘れれば、行動は不毛になるだろう。われわれは、人間の尊重を築きたいと思っている。どうしてわれわれは、同じ陣営の内部で憎み合うのか」¹⁶⁾。人間の尊重が人びとの中に築かれれば、人びとは、人間の尊重を確かなものにする社会的、政治的、あるいは経済的体制を築き上げるだろう。

サン・テグジュペリは、友人レオン・ウェルトに向かって、君の友情が必要だと叫ぶ。論戦にも除名にも狂言にも飽きた。ウェルトのもとに戻り、心の内を思い切り打ち明けた

12) *Ibid.*, p. 36.

13) *Ibid.*, p. 37.

14) *Ibid.*, p. 38.

15) *Ibid.*, p. 39.

16) *Ibid.*, p. 39.

い。ウェルトなら、自分の中にある人間 *Homme* を認めてくれる。彼のもとでは純粹になれる。自分の言葉も行動もウェルトが受け入れてくれるのは、自分という人間を受け入れてくれるからだ。

サン・テグジュペリは、ユダヤ人であるため一層危険にさらされているウェルトのために闘わなければならないと思う。「われわれ国外にいる フランス人にとっては、この戦争で、ドイツの存在という雪によって凍らされた種子の貯えを解放することが問題なのだ。あちらにいる君たちを助けることが問題なのだ。君たちがその根を伸ばす基本的権利を有するこの地上において、君たちを自由にすることが問題なのだ。圧制という穴倉の中においてこそ、いつも新しい真実が準備されるのだ。4千万の人質が、あちらで新しい真実について考えているのだ。われわれは、前もってこの真実に従うことにしよう」¹⁷⁾。

サン・テグジュペリは、アメリカに亡命し自由な立場にいる自分たちと、ドイツの占領下で危険におびやかされている同胞を比べて、自分たちを厳しく責める。「……まさしく君たちこそ、われわれに教えてくれるのだ。われわれが、君たちに精神の炎をもたらしているのではないのだ。君たちはすでに、蠟のように自分自身の実質を燃やして精神の炎を維持しているのだ。君たちはおそらく、ほとんどわれわれの本を読まないだろう。おそらくわれわれの演説を聞くこともないだろう。われわれの考えなど、おそらく吐き出してしまおう。われわれが、フランスを築いているのではない。われわれは、フランスに尽くすことしかできない。たとえどんなことをしたとしても、われわれには、いかなる感謝も受ける権利はない。自由な闘いと闘いの中の抑圧の間には、いかなる共通の尺度もない。兵士の仕事と人質の仕事の間には、いかなる共通の尺度もないのだ。君たちは聖者だ」¹⁸⁾。

3. 作品の本質

サン・テグジュペリが『ある人質への手紙』を書いた背景およびこの作品の内容について見て来たが、ここではなぜ彼がこの作品を書かなければならなかったかについて述べてみたい。

サン・テグジュペリは、1940年12月にニューヨークに着いた。ニューヨークに住むフランス人は、ペタン派、ドゴール派、無党派に分かれて争っていた。彼は、自分に敵対するたくさんのフランス人がいるのに驚いた。特にドゴール派の人たちの彼に対する非難は激しかった。彼は、なぜ非難を受けなければならなかったのであろうか。彼は、実際に戦いに参加した者として、休戦条約の締結、その結果成立したヴィシー臨時政府の存在を認めた。それ故、ペタン派、ヴィシー派と見なされた。一方的にはあったが、臨時政府は、

17) *Ibid.*, p. 42.

18) *Ibid.*, p. 42.

祖国再建の知恵を求めするために設立したヴィシーの国民会議の一員に彼を任命した。彼はそれに応じなかったが、そのことで、ドゴール派の人たちは、彼がヴィシー派であるという確信を強めた。

休戦条約もヴィシー臨時政府の存在も容認しなかったド・ゴール派および海外の対独レジスタンス組織の人たちは、それらを容認するサン・テグジュペリの姿勢を激しく非難し、ナチ、ファシスト呼ばわりする者さえいた。非難されても、彼は自分の態度を変えようとはしなかった。

『戦闘パイロット』（1942年2月）では、フランス国民に、祖国を救うためには、利己主義や虚栄を捨てなければならないことを教えた。また、『学問への道』（1942年5月）では、アメリカの青年に向かって、人間共同体の建設を説いた。さらに、『到所にいるフランス人への公開書簡』（1942年11月）では、団結して祖国の解放のために闘うべきことを訴えた。そして、『ある人質への手紙』（1943年2月）でも、ドイツに対するフランスの敗北を認め、フランス人同士が相争うことを止めて、一致協力して祖国の再建に邁進すべきことを説いた。

『ある人質への手紙』で、サン・テグジュペリは、彼と一緒にアメリカへ向かう船に乗っていた亡命者たちを非難した。過去のことしか語らない無気力な亡命者を亡霊と呼んでいる。この亡命者の描写は、アメリカに亡命したフランス人の心を傷つけた。

これらの亡命者と異なって、サン・テグジュペリの心は豊かであった。フランスには、彼が頼ることのできる、彼の進路を決めるのに必要な友達がいるからであった。彼は特に、ユダヤ人であり、病気のレオン・ウェルトのことを思った。ソーン河の岸での充実した語り、心と心が緊密に結ばれた素晴らしい1日を思い出す。

人間は互いに尊重し合い、互いの矛盾を乗り越えて成長し、未来を築かなければならない。しかるに今日、われわれの上昇の条件である人間の尊重が危機にさらされている。

サン・テグジュペリは、いかなる党派にも属そうとしなかった。党派に属せば、党派の方針に縛られ、他の人々の考え方や意見を認めず、意見を異にする人々を軽蔑し憎悪する恐れがあるからであった。考え方や意見が異なっても、同じ目標に向かって前進しているのであれば、その人を尊重しなければならない。社会的、政治的、経済的体制は、人間尊重の上に築かれなければならない。

彼は、ニューヨークでフランス人同士が互いに非難し合い、憎しみ合っているのを見て、耐えきれなくなった。レオン・ウェルトに向かって、「君が必要だ」と叫ぶ。ウェルトは、彼という人間を受け入れてくれる最愛の友人であった。彼は、ユダヤ人であるために一層危険にさらされているウェルトのために闘う決意をする。アメリカに亡命し自由を享受し、安楽な生活を送っている自分たちと、ドイツの占領下で人質となって苦難の生活を送って

いる同胞との間には大きな隔りがある。フランスのために闘っているのは、自分たちではなく、ドイツの占領下にいる人たちである。そのことを認識せず、アメリカに亡命して来たフランス人は、祖国のために闘っているのは自分たちであると信じている。

ド・ゴール派の人たちは、ベタンとドイツとの共謀の罪を許し、ヴィシー臨時政府が犯した過ちを忘れていないとサン・テグジュペリを厳しく責めた。アメリカに滞在し、口先だけで闘っている彼らが、現実には戦闘に参加した自分を非難する権利はない。戦闘に参加したことがない、また参加する気も全くない彼らが、休戦条約やヴィシー臨時政府を非難する権利もない。

ドイツ占領下で苦悩している人たちのことを考えると、サン・テグジュペリは、アメリカで自由に安楽な生活を送っている自分が恥ずかしくなった。戦闘パイロットとして、ヨーロッパの戦いに再び参加しなければならないと思った。アメリカ軍の一員として、北アフリカに連れて行ってくれるよう関係当局に頼んだが、拒否された。しかし、繰り返し頼み、ついに北アフリカ行き船に乗ることに成功した。アルジェに上陸すると、今度はかつて所属していた飛行大隊への復帰のために奔走した。アイゼンハワー将軍の好意によって復帰が認められ、43歳で当時最新鋭の飛行機であるP38ライトニング機を操縦することは不可能であると考えられていたにもかかわらず、訓練を重ねて、その飛行機を操縦し、偵察飛行に従事する。2回目の偵察飛行から帰還した時、着陸を失敗し、飛行を禁止される。しかしながら、再復帰のためにまた奔走し、ついに2/33飛行大隊へ復帰する。それ以後、何度かフランスを偵察飛行したが、1944年7月31日、P38に乗って飛び立ったまま帰還しなかった。

サン・テグジュペリは、アメリカへの亡命を決意する前に、ド・ゴール将軍のいるイギリスへ行くことを考えたが、将軍が彼に好意を抱いていないことを知っていたので、そこへ行くのを諦めた。ド・ゴール将軍は、1943年10月30日の、アリアンス・フランセーズ設立60周年記念演説で、フランス精神を擁護した主要作家について述べたが、故意に彼の名を挙げなかった。将軍は、ヴィシー政府を容認する彼を徹底的に排斥した。一方ニューヨークでは、ド・ゴール派の人たちが彼を非難し、罵った。非難に対して、彼は、自分自身を完全に戦いに参加させることによって答えた。戦いに参加し、生命を危険にさらす者のみが、祖国について語る権利があるからであった。

『ある人質への手紙』を発表するや否や、彼は、そこで宣言したことを実行に移した。北アフリカに行き、P38ライトニング機に乗り、ドイツ占領下のフランスの上空を飛んだ。そうしている時彼は、人質となってフランスに留まっている人々と苦しみを共にすることができたし、アメリカに滞在していた時、フランスに留まっていた同胞と彼自身の間にあった大きな隔りは縮まるように思えた。

着陸に失敗し飛行を禁止されても、彼は、飛行許可を得ようと必死に努力した。また、戦闘機を操縦できる年齢をはるかに超えていたにもかかわらず、飛ぶことを断念しなかった。どうして彼は、これほどまで飛ぶことに執着したのであろうか。フランス上空を飛ぶことによって、ドイツ占領下で苦しむ同胞と一体となりたかったのであった。飛ぶことを止めることは、彼にとっては、同胞を見捨てることであった。ドイツの戦闘機に撃墜されることも、機械の故障か操縦ミスで墜落することも十分予想できたが、飛ぶことを欲した。飛ぶことによって、ドイツ占領下の同胞と苦しみを共にすることは、フランスの外にいる自分の当然の義務であると思った。そして、戦闘機に乗り、戦闘に参加し、フランスの輝かしい未来を信じて消え去った。それは、覚悟していた死であった。

『ある人質の手紙』を書くことによって、サン・テグジュペリは、彼をナチ、ファシスト呼ばわりしたド・ゴール派を中心とした人たちに対して、身の証を立てようとした。彼は、現実には戦っているのはフランスの外にいる人たちではなく、ドイツ占領下のフランスで苦しんでいる人たちであり、亡命者である彼らに自分を非難する権利がないことを間接的に示した。また、党派が異なり意見が異なっても、同じ目標に向かって進んでいるのであれば、人間尊重の精神に立って相手を受け入れなければならないことを訴えた。

サン・テグジュペリは、宣言するだけでは、自分を非難する者に対して身の証を立てることはできないことを知っていたので、自分が単なる亡命者でないことを示すために、宣言を忠実に実行した。その意味で、1943年2月に出版された『ある人質への手紙』は、その時以後の彼の行動の指針を明示した作品とすることができる。

この作品に続いて1943年3月に出版された『星の王子さま』において、王子は毒へびに噛まれて、古い皮である肉体を脱ぎ捨て、魂だけとなって自分の星に帰った。王子と同じようにサン・テグジュペリも、飛行機から抜け出て、魂となってフランスに帰った。